

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4390101956		
法人名	社会福祉法人 伸生紀		
事業所名	グループホーム画図こもれび		
所在地	熊本市東区画図町所島205-6		
自己評価作成日	令和6年2月15日	評価結果市町村受理日	令和6年5月15日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/43/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人ワークショップ「いふ」		
所在地	熊本県熊本市中央区水前寺3丁目15-1		
訪問調査日	令和6年3月15日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

<ul style="list-style-type: none"> ・食事水分摂取の状態や変化に速やかに対応、必要に応じて早期に医療と連携し、安定した体調を保っている。 ・行事を多く計画し、日々の生活を楽しんでいただけるよう柔軟に計画している。 ・おやつを手作りしている。 ・ご家族に積極的に声をかけて、行事や会議への参加を促すだけでなく、家族と一緒に外出する機会を持つなどして、ご家族とご利用者の関係性が途切れないように、双方に支援を行っている。 ・日頃から清掃に力を入れ、清潔な環境保持に努めている。 ・法人全体で、4つのゼロ(おむつゼロ、誤嚥性肺炎ゼロ、脱水ゼロ、身体拘束ゼロ)を掲げ、ご利用者の当たり前の生活を支えるための指標として、職員一丸で取り組んでいる。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

<p>法人の理念・基本方針・ホームの目標に沿い、入居者が、「こもれびの日差しのように穏やかでキラキラと輝かれるよう」な支援を心掛けている。法人全体で、身体拘束廃止に取り組んでおり、年2回の研修後及び2週間後に「振り返りシート」を提出したり、毎月、ホーム内で不適切なケアが行われていないかのチェックリストを記載し、不適切と思われる項目があった場合は話し合い、業務改善に繋げる等の取組が行われている。また、法人全体で「おむつゼロ」に取り組んでおり、排泄の自立支援に努め、全員が布パンツを使用している。食事はホームで手作りしており、お寿司屋さん・ケーキビュッフェ・ラーメン屋さん・クリスマス会のフルコースなど、趣向を凝らした食を楽しむ多くの機会が作られている。今年度は、感染症の状況を見ながら、思い出の地を巡るドライブや、初詣などに出かけたり、施設内行事についても様々なアイデアを出し合い、工夫して多くの企画が行われており、入居者が楽しく暮らせるよう、職員は熱意を持って支援している。</p>

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	新人研修や中途採用の職員にも、研修で理念についてしっかり学習の機会を設けている。 毎朝、朝礼時に基本理念の唱和と目的を確認し、意識づけを行っている。	法人の理念・基本方針に基づいて、毎年ホームの目標を作成しており、毎朝唱和して意識付けを行なっている。入居者が、「こもれびの日差しのように穏やかにキラキラと輝かれるよう」、理念に沿った支援に努めている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域の区役や祭りなどのイベントに参加することで地域住民との交流を図っていた。 地域交流室の活用を目指し、環境を整えることで地域に開かれた施設づくりを目指している。	以前は地区の区役や校区の夏祭り等に参加していたが、コロナ禍以降中止となっている。今年度は、再開された認知症声掛け訓練や江津湖ウォークラリーに職員が参加して、地域との交流を図っている。地域に交流室を活用してもらおうと準備していた矢先にコロナ禍が発生し中断した経緯があり、交流室の地域への開放について早期に進めていきたいとしている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域の健康クラブや行事に参加し、認知症の支援を行っていることや、地域交流室の活用について伝えてきた。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	新型コロナウイルス感染症拡大防止のため集合しての会議開催が困難で、書面での開催になっているが、行事報告や、ご利用者・職員の変動、事故の報告などを行い、意見交換で出た意見をサービスに活用している。	コロナ禍で、今年度の運営推進会議は全て書面での開催になっている。ホームの活動状況・事故状況・職員研修状況・今後の予定と、外出やイベント等暮らしの様子の写真を多数掲載した資料を委員に配布している。毎回、委員からの意見・要望等も返信されている。	コロナの感染状況を見ながら、対面の運営推進会議が行われ、より活発な意見交換が行われることを期待したい。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	随時連絡を行い、協力関係を作っている。	運営上の疑問点などは、市担当者に電話や質問票で問い合わせ、適切に回答を得ている。包括とは、運営推進会議や包括主催の地域連携会議への出席等で、日頃から連携が図られている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	事業所内の研修で学ぶ機会もあり、職員全体に何がいけないのか伝えている。法人として身体拘束はいかなる場合でも行わないこととしており、それに基づいて、開設時から身体拘束は行っていない。	身体拘束廃止に関する研修は、法人で年2回オンラインで実施され、研修後及び2週間後にそれぞれ「振り返りシート」を提出することになっており、研修内容の浸透が図られている。また、職員は毎月、ホーム内で不適切なケアが行われていないか、チェックリストで確認し、不適切と思われる項目があった場合は話し合い、業務改善に繋げている。法人内でお互いに他事業所をチェックする仕組みもあり、法人全体で、身体拘束廃止に取り組む強い姿勢が感じられた。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	日頃から不適切な言葉遣いはその場で注意し、虐待防止への意識づけを行っている。法人全体で、毎月不適切なケアなど行動を振り返る機会があり、反省点を翌月に活かすよう努力している。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	管理者は研修に参加し現状を理解できている。職員の中には制度を知らない職員もいるので、今後研修に参加するなど、学ぶ機会を作りたい。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約は全て管理者で行っている。疑問点や家族の要望を尋ね、丁寧に説明を行っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進会議には全家族に案内を行い、多くのご家族からご意見や要望を伺い、運営に反映させている。	家族の面会時や電話で、近況や連絡事項をこまめに伝えており、その際意見・要望等を尋ねている。家族からは、「そろそろ散髪をお願いします。」「外泊はいつ頃からできますか？」など、入居者に関する具体的な要望や質問などが出されている。また、2か月に1回、運営推進会議の資料とともに、担当者による近況報告のコメントと写真を送付し、家族の安心に繋げている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	部署ミーティングや申し送りなどで意見交換をし、できるだけ意見を反映できるよう努力している。	毎朝のミーティングや業務の中で、個別のケアや業務改善、行事についてなど活発に意見交換を行っている。出された意見・提案等は検討し、できるだけ反映させている。行事に関して、様々なアイデアが出され、工夫を凝らして多くの企画が行われている。入居者が楽しく暮らせるようにとの職員の熱意が伺えた。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	法人の人事考課制度に基づき、上司が各職員の評価を行う機会があり、それを基に評価に反映されている。 有給を消化できるよう残日数を確認し、積極的に取得してもらっている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	研修に合う職員を選定して積極的に参加してもらっている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	管理者が中心になり、地域の交流を行っている。 職員から他のグループホームを見てみたいと意見が出ているので、今後取り組んでいきたい。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	ご利用者の日常の様子や表情・会話から言葉にならない本人の思いや願いを知ろうと努力している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	契約時にご家族から要望やご意見を伺っている。 日頃から些細なことでもご家族に連絡して関係づくりに努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	日々の申し送りから問題点を把握して、迅速に対応するように努めている。 また、担当者会議や面会の際などに、日常の様子や問題点を報告して、ご意見を聞いて対応を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	季節の行事を一緒に楽しんだり日常の家事を共に行い、これまでに身につけていることを披露する場を設けたり、人生の先輩として経緯を表すように努めている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	ご家族と積極的にお話して情報を得たり、「私の人生の歩み」というご利用者のこれまでの人生をご家族に記入して頂き、その方らしい生活を送って頂くように努力している。誕生日会や行事などで一緒に過ごす時間を持つように努力している。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	近所の方や友達が面会に来られたり、買い物時に近所の方に遭遇することもあった。コロナ禍のため外出に限りがあり、機会が減っているので今後の課題である。	生活歴の把握を大事にしており、情報を基に、5月にはコース分けをして入居者の自宅や出身校、昔の勤務先など、ゆかりの地を巡るドライブを行なっている。現在、面会は共用スペースで行うことができおり、電話の取次ぎや年賀状を書く支援などを行い、馴染みの人や場との関係継続支援に努めている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	食事をリビングで行い、レクリエーションや余暇時間で一緒に外出を行い、ご利用者同士が顔を合わせて会話できる環境を作っている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退居後も葬儀に参列したり、ご家族に連絡を行い、精神面のフォローを行ったり、居宅介護支援事業所と情報共有を行っている。入院や転居でも丁寧に情報交換を行い、必要なケアが続くよう支援している。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	関わりの中で言動や表情からご利用者の意思を確認している。ケアを検討する時、常にご利用者主体で考えるように努めている。	入居者の多くは、思いや意向を言葉で表現できているが、言葉が出にくい人には聞き方を工夫して表情等で意向を汲み取っている。それぞれが望む生活をしてもらうため、日頃からできるだけ好きな物を選んでもらい、何をしている時に落ち着きやにこやかな表情がみられるか、細やかに観察し、思いや意向の把握に努めている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	ご利用者やご家族からこれまでの生活歴や嗜好を聞き、好まれていること、これまでの習慣を取り入れるよう努力している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	一人一人生活リズムに合うように、その方にあつた対応をしている。一人一人の能力の把握を行い、ミーティングなどご利用者について話す機会を作っている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ご家族からの聞き取りを行った意向や、医療機関とも情報共有を行い現状を把握して、反映させた計画書を作成している。	半年に1回、ケアマネがモニタリングを行い、計画案を作成して家族の意見も踏まえて話し合い、計画の見直しを行なっている。本人の思いは本人の言葉をそのまま記録し、計画に反映している。一人ひとり個別性のある計画作成を心掛けている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の申し送りや記録、ミーティングでの話し合いから、職員間での情報の共有に努めている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	当日に外出を計画したり、頂いた野菜で献立を考案したり、会話で出たおやつを提供するなど、柔軟に対応するように努めている。 また、訪問サービスなどご利用者やご家族の希望に沿ったサービスを提供できるよう情報提供に努めている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	買物や外食、地区の行事等で地域に出向いており、少しずつ地域との交流が進んでいるが、まだ少ない現状である。 今後はより積極的に地域に目を向けたいと考えている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	定期的に主治医の診察を行い体調管理を行っている。診療の様子はご家族に伝え、時間を合わせて出席されるように勧めるなど、納得を得られるように支援している。	かかりつけ医は入居時に本人・家族の希望を確認し、現在はほとんどの方が協力医療機関をかかりつけ医とし、月2回の往診を受けている。その他の通院は、家族の同行を基本としている。また、週1回、全員が訪問看護ステーションによる健康管理を受けている。協力医とは24時間連絡できる体制が取られており、体調に異変がみられた場合は協力医に連絡し、指示を得て対応している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	訪問看護ステーションと契約しており毎週1回定期訪問で、体調の変化に対して相談し助言を頂いている。 必要時には、主治医へ連絡を行っており連携できている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には病院へ出向き本人やご家族と会うように努めている。 病院の担当者や家族と会うだけでなく、こまめに電話で情報交換を行い、退院前カンファレンスに参加するなどして、できるだけ早期の退院を目指すよう努力している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですることができることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時に、重度化した場合に備えて、事前の意向を確認している。看取りを行う姿勢はご家族に伝えており、実施も行っている。	入居時に重度化した際の方針について説明し、意向を確認している。重度化した際は状況と今後について説明し、再度意向を確認してケアプランを更新し、看取りケアに移行して主治医・家族と連携し対応している。看取りについての研修も行なっている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	経験のない職員から不安との声が上がったために、実技で学ぶ機会を持ったが、まだまだ不十分と感じているので、今後取り組んでいきたい。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	避難訓練を実施し、未経験の職員が対応できるように調整しているため、少しずつ対応方法が実技で習得できている。 地域住民とも協力体制もこれから課題になっている。	火災避難訓練を年2回、消防署や防災設備会社の協力を得て日中・夜間想定で行っている。河川氾濫の危険も想定して、水害対応の訓練も行っている。水害が予測される場合は隣接する結婚式場の2階への避難や、場合によっては早めに美里町の法人本部に避難することとしている。食料備蓄は3日分確保している。運営推進会議委員等地域の方を含めた避難訓練を再開したいとしている。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	敬語で接し、一人一人ご利用者に合った尊重した言葉を使うようにしている。日頃から言葉かけについては一覧表を掲示して正しい言葉遣いに努めている。不適切な声掛けがあった場合には注意しあうように努めている。	言葉遣いは敬語で、入居者それぞれに伝わり易い言葉を使うことを基本とし、耳の遠い人には耳元で話すことを心掛けている。排泄や入浴の場面では他の人に見られないように、また、排便後は除臭スプレーを使用するなど、プライバシーの確保に留意して支援している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日常生活の中で、一人一人の意思確認を行ってケアを行っている。飲み物などでも、自己決定できるように支援している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一日の流れはあるが、ケアについてはご利用者のその日の状態やペースに合わせて行うよう努めている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	散髪などでも染髪やカット、パーマなど一色単にならないように選ぶ環境作りを行っている。マニキュアや帽子、化粧などでおしゃれを楽しんで頂けるよう努めている。服の種類もこれまで以上に本人に選定してもらうように努めていきたい。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	日常では管理栄養士が作成した献立表をベースにしているが、行事や誕生日会、その日食べたいものや、頂いた食材の活用などを行い、柔軟に対応している。 ご利用者と一緒に調理、おやつ作りを行い、食べる楽しみを持つよう心掛けている。	献立は法人の管理栄養士が作成したものを活用し、行事の際などは臨機応変に変更している。調理は勤務表により、職員が行っている。誕生日は本人のリクエストメニューと手作りケーキでお祝いしたり、お好み焼き・ぎょうざ・梅ジュース・干し柿などをみんなで作ることもある。また、お寿司屋さん・ケーキビュッフェ・ラーメン屋さん・クリスマス会のフルコースなどの他、今年度はフードコートでの外食も行なっている。職員の趣向を凝らした食を楽しむ多くの機会が作られている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事・水分摂取量を把握して、少ない場合には職員間で共有して、ゼリーなどを提供して摂取量が確保できるようにしている。主治医と連携し、嚥下状態の把握に努めてご利用者に合った食事形態を提供している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後に必ず口腔ケアを実施している。必要なご利用者に対しては職員が仕上げ磨き、確認を行い清掃を保っている。歯科訪問診療に毎週1回来て頂き、定期的に専門家による口腔ケアを行い、日常のケアについて相談・助言を頂く機会を作っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チェック表にて一人一人の排泄パターンの把握を行ってトイレでの排泄を支援している。また使用しているパットが本人の状態に合っているか常に検討を行い、おむつゼロの方針の基、布パンツを使用するなど、不快に感じないように取り組み、排泄の自立に向けて取り組んでいる。	排泄は食事の前なのか後なのか、入浴の前なのか後なのか、これまでの習慣を聞き、排泄パターンを把握してトイレへの声掛けを行っている。法人全体で「おむつゼロ」に取り組んでおり、全員が布パンツ又は布パンツとパットを使用している。それぞれの動きに沿った、できるだけ不快を感じないパットについて検討し、排泄の自立支援に努めている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	毎日夜勤者が排便の有無を最終確認して、必要時には申し送り、必要分の下剤の与薬を行っている。毎日のヨーグルト摂取やマッサージの他、食物繊維などの摂取で下剤を減らすよう取り組んでいる。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	入浴に気分が乗らない時には無理をせず、夜間や別日に声をかけたり、ご利用者の意向を確認している。個浴で、希望に合った温度設定と、毎日のお湯の入れ替えを行ったり、入浴中に水分を提供するなど、気持ちよく入浴できるよう心掛けている。	入浴は週2日を基本としている。リフト浴を設置しており、全員浴槽に浸ることができる。ゆず湯やしょうぶ湯を行ったり、入浴剤を使用することもある。夏場は入浴中に冷たい飲み物を提供するなど、気持ちの良い入浴となるよう支援している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	ご利用者の希望や状態に応じて日中に臥床される方もいる。夜間の不眠に対しては無理に寝て頂こうとせず、離床して話を傾聴したり、ホットミルクを提供するなどして落ち着いて頂けるように工夫している。できる限り過剰に眠剤を使用しないよう主治医と連携して減量している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬が変更した時には、注意点まで合わせて申し送るようにして、状態の変化の観察を行っている。薬の作用が十分に理解できていない職員もいるため伝達が必要である。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	調理や洗濯などの家事の中で、行ってきた習慣を維持できるように支援している。毎日のレクリエーションの他、季節行事や外出などを積極的に計画し、楽しんで頂けるように努力している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	家に帰りたいなどの希望をかなえることが難しい場面があるが、買い物や散歩で外に出る機会を作るようにしている。ご利用者の思い出の地を巡る機会を作り、個別のニーズに合わせた外出支援を行ってきたので、今後も継続したい。	天気の良い日にはホーム周辺を散歩をしたり、テラスでおやつを食べるなど、外に出る機会を作っている。今年度は、感染症の状況を見ながら、思い出の地を巡るドライブや、初詣などに出かけている。今後はさらに買い物や季節の花見なども行ないたいとしている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	現状では自分で管理されている方はいない。日常の買い物などで、財布を渡して支払いを支援するなど、使う機会を持つことはできているが、現状では気が付いた時に行っている程度なので積極的に取り組んでいきたい。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	ご利用者の希望がある時には電話を行っている。また、年賀状などを一緒に書き、家族とのやりとりができるよう支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	お花を飾ったり、壁面飾り、写真を掲示するなど季節感を味わって頂けるように工夫している。温度や冷暖房器具の使用など、ご利用者の希望に沿って対応するように努めている。玄関の開閉には猫の鳴き声センサーを使用して、自然な雰囲気の中で安全に配慮できるよう工夫している。	2つのユニットのリビングは日頃から開放されており、入居者は自由に行き来できる。ホーム内は清掃が行き届き、花やメダカ・金魚の水槽が置かれたり、壁飾りや入居者の活動の様子の写真が掲示され、落ち着いた雰囲気となっている。訪問時はほとんどの入居者がリビングの椅子に座り、好きな飲み物を飲みながら、テレビを見たり新聞を読んだりお話ししたりと、自由にゆったり寛いでいる様子が伺えた。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	全体的には食事の時の席が習慣化してきてはいるが、特に固定はしておらず、その時と気分に応じて、ソファで過ごしたり、いつもとは違う席で過ごしたり、ご利用者同士の関係性や気分で、思い思いに過ごしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	ご家族に馴染みの物を持ってきて頂くように声をかけている。季節ごとのカードやご家族からのメッセージなどを掲示して、本人らしい空間になるように努力している。	各居室には、洗面台・ロッカー・整理ダンスが設置されており、それぞれテレビ・テーブル・椅子などを持ち込み、配置している。ダンスやテーブルの上には時計・鏡・ぬいぐるみ・家族の写真・自分で作った手芸の作品などが飾られ、それぞれに居心地の良い部屋作りが見られた。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	台所はご利用者が使用できるよう広く作られており、多人数で調理を行うことができる。必要に応じて目線の高さに部屋の名前や、トイレに「トイレ」と掲示するなどして、認知症によって困っている状況が軽減できるよう工夫している。		